

前回、山片蟠桃の思想の説明に入りました。その続きをしますが、項目番号を再度書いておきます。②朱子学に立脚までです。②の内容から今日の範囲になります。

1. 合理主義

①洋学の受容

②朱子学に立脚

- ・朱子学の経験的合理主義を評価した。

前回、参考として朱子学を説明しましたが、最後の方に「性」（人間の本質）知る手段として「居敬窮理」があると言いました。「居敬」は瞑想などによって感情を克服すること、「窮理」は外部の物や事の真理をきわめることでした。

蟠桃は「窮理」に注目し、外界のあらゆるものの本質を追求することは、西洋の自然科学の精神と同じだと考えました。いろんな外界の事象を調べてそれを合理的に説明づける・・・経験合理主義の同一を見出したのです。

朱子学をこのように評価するのは山片蟠桃だけで、日本はもちろん中国にもいません。実際の朱子学で自然科学が発展しなかったのは、中国では、外界の真理は過去の聖人がきわめているということで、古典の勉強にすり替わってしまったからです。

- ・西洋科学と矛盾する場合は、朱子学を批判している。

朱子学の主張と西洋科学の主張が一致しないとき、蟠桃は西洋科学を優先しています。実験や調査という点で、西洋に軍配をあげたのです。

では、具体的な事例を紹介します。

【天】

天とは何かについて、朱子学を批判した荻生徂徠と言う学者は、そもそも天は知的な認識の対象にならず、ただ畏敬の念をささげるのみであると主張しています。朱子学のように、なんでも理を窮められるというのは傲慢な態度であり、儒教の伝統を破壊すると考えました。

これに対し、蟠桃は朱子学の窮理の重要性を説きます。窮理はなんでも対象になり、究極の対象は天である。天を知れば、地を知り、地を知れば、人を知る。つまり人間の問題を扱うには、まず天を知るべきである。天文学はそのための知識を与えてくれると考えました。

蟠桃の主張には、朱子学と西洋科学を共存させようとする意志が感じられます。次は鬼神です。鬼は死者の靈魂のことで、我々のイメージする、角の生えた鬼ではありません。

【鬼神】

従来の儒学者は鬼神を実体視していました。昔からいろいろな姿で描かれています。朱子学にもこの傾向があります。

蟠桃は、こういったものは陰陽の特殊な作用だと主張しています。朱子学でも、この世界はもともと「気」（ガス、気体）だけがあり、流動していた。動きの速い部分が「陽」となり、緩い部分が「陰」に分かれ、陽気と陰気になった。この二気が混じりあい5つの元素ができ、その混ざりあいから、天や地ができたとかんがえていた。基本的に蟠桃もこれを受け継いでいます。

古代中国の民間思想がベースになっているので、現代人から見ると違和感があるかもしれません。しかし大事なことは、鬼や神をただの物理現象ととらえていることです。それを鬼とか神で説明しているだけで、絵に描かれているようなものは存在しないと考えています。

蟠桃は実体験にもとづかない、そして実体験できない話を嫌っていました。幽霊の話や遠方の行ったことのない国の話などです。地理も蟠桃は好みでしたが、もちろん西洋地理学です。実際に当時の西洋人は世界中を航海していましたので彼らの地理学は信用しました。これに対し東洋では、遠くの国には、お腹に大きな丸い穴が開いていて向こう側が見える人々が住んでいるとか、無責任な話が流通していて信用できないのです。

鬼神論に見られる蟠桃は無神論者です。さらに上記の陰陽説のように物質ですべてを説明する唯物論者です。著作「夢の代」に次のような和歌というか狂歌が残されています。

「神仏（かみほとけ）化け物もなし 世の中に
奇妙不思議のことは なお無し

」

日本思想史で、山片蟠桃は特別な重要人物として扱われていません。しかし、ソビエト連邦（ロシアを中心とした共産主義国家 1922～1991年）時代の大学の哲学の教科書には、最重要な哲学者として山片蟠桃があげられていたそうです。言うまでもなく、共産主義は唯物論を重視しますので、蟠桃を評価したのです。

2. 啓蒙家としての性格

啓蒙家（けいもうか）というのは、知らない人を教え導く人のことです。蟠桃は西洋の勉強をして、日本の立ち遅れを痛感するようになりました。鎖国が続いて国内問題に明け暮れているうちに、日本人の大半は、西洋に遅れているという自覚もなかったのです。

①幅広い経験を積むことを強調。

蟠桃の時代、1792年ロシアのラックスマンが北海道の根室に来た。日本人の漂流民の返還と通商を求めている。幕府の老中と国交樹立の約束をし、長崎入港の許可証を受け取って帰国。1804年レザノフが正式なロシアの使節として長崎に来て、先の約束の履行を求めた。その時すでに幕府は外交能力を失っていて、半年も待たせて通商拒否の返答をした。怒ったレザノフの部下たちは1806～1807年にかけて択捉島や樺太で略奪や放火をした。

この事件に対し山片蟠桃はコメントをしています。ロシアへの恐怖などが話題になるなか、蟠桃はまったく別の評価をしているのです。それはレザノフが、ロシアから船に乗って正確に長崎まで来たということです。蟠桃は著書「夢の代」の中でレザノフの航路を示しています。まずロシアの中心はヨーロッパです。ヨーロッパ側の港を出発して大西洋に出ます。そのまま西へ進むとアメリカ大陸があります。当時、パナマ運河はありません。北極付近は凍結して進めないで、一旦赤道を越えて南下し、南アメリカ大陸の南端と南極の間を抜けて太平洋に出ます。赤道を越えて北上し、ロシア領のカムチャッカ半島に寄り、そこから北海道、本州の東を南下し九州を廻って長崎に到着。もちろん途中何回も各地の港に寄り、燃料や食糧を補給しています。

蟠桃は「これを見るとレザノフは、広い世界を完全に熟知しており、まるで隣の家に行くように、やすやすと日本に来ている。我々が池に小舟を浮かべて、（少し揺れたぐらいで）びっくりして恐怖を感じるのと、比べるのもはずかしい。」と述べています。

レザノフは世界中を廻っている。その知識と技術はすばらしい。そしてその経験から得た知見は、日本人の及ぶものではない。世界を知る経験の必要性を蟠桃は感じていたのです。

②国字改革について

蟠桃の提言の中で、もっともユニークなのは国字の改革です。彼はなぜ西洋人が優れた業績を上げ、日本人はそうでないのか考えました。たどり着いた結論は、日本人にとって文字の習得の負担が大きすぎることでした。「夢の代」で蟠桃は次のように書いています。

「たしかに、日本や中国の人は幼少の頃より、字の勉強をしているけれど、一生かかっても、文字を知り尽くすことはできない。そのうえ、仏教の勉強、詩歌、茶道、謡曲、舞楽を始めとして役に立たない稽古や芸術に日を費やし……」
というように日本人の国字（主として漢字）に時間を使い過ぎている点を指摘しています。おまけに踊りや茶道などにも時間を使い過ぎ、その先の天文学や地理学など大事な勉強にすすめないと考えました。

蟠桃によると、ヨーロッパ人は学ぶ文字は非常に少ない。アルファベット 26 文字の大文字・小文字・筆記体、それから数字など 100 字くらいなので、10 才までに国字を学びつくして、有益な学術に打ち込めます。日本人との差は歴然としています。

彼は具体的に日本語の文字をどうしたらいいのか答えていません。その点が残念ですが、漢字の勉強に多くの時間を費やしているのは現在でも同じです。蟠桃の時代はどこまで漢字を覚えたらいいかという目安がなかったから大変です。現在の教育漢字や常用漢字といった一応の制限がついているのは助かりますね。明治以降でも漢字廃止論者はいましたが、最近はあまり聞きません。

③実学の提唱

実学という言葉は、実生活に役立つ学問のことで、商人らしい発想です。

「仁・義・忠・孝の道は学ばなければならない。詩や文章を暗記するような芸に上達すべきでない。文の勉強をしてかえって軽薄な人間になるな。これはすべて実行の学（実学）をしないで、虚栄心を満たそうとした弊害である。」

蟠桃は道徳を重視しましたが、詩や美文を暗誦して人前で披露するような行為を軽薄だと嫌いました。実学を学ぶ必要性を訴えています。

ここで実行の学と言っている内容は、いまひとつ明確ではありません。詩や美文を読むレベルの人を批判しているのですから、「読み書きそろばん」をしている子供が対象とは考えられません。だとすると、この実行の学とは天文学や地理学といった西洋人が日本より先を行っている学問ではないかと推量できます。

蟠桃による実学の提唱は意義深いものですが、具体性を欠き広く国民に訴えるものとはいえません。しかしながら、長い間常識と考えられてきた国字の習得にかかる時間が長すぎるという意見や、詩歌、茶道などを役に立たないものとし、世界の別の有益なものを学ぶべきだという主張は、次の時代の教育を予見したものとして、十分評価されるべきだと考えます。

そのことは明治時代の教育家として有名な福沢諭吉（1835～1901）を見るとよく分かります。山片蟠桃は 1821 年に亡くなっていますので、直接の接点はありません。しかしながら、福沢の主張を見ると、蟠桃とよく似たことを考えているのです。

福沢諭吉の著書「学問のすすめ」から、いくつか文章を引用しておきます。

- ・「学問とは、ただ難しき字を知り、解しがたき（理解しにくい）古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき（世の中の役に立たない）文学を言うにあらず（言うのではありません）。」
- ・「されば（そうであるならば）、今、かかる実なき学問（このように役に立たない学問）は、まず次にし、もっぱら勤むべきは、人間普通日用に近き実学なり（人間の普通の生活に役立つ実学です）。」
- ・「これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取り調べ、たいていのことは日本のかなにて用を便じ（間に合わせ）、あるいは年少にて文才ある者へは横文字をも読ませ・・・」

最初の文章は山片蟠桃の主張を連想させます。同じ問題意識です。2 番目の文章は有名なものですが、実学のことを述べています。福沢はこの文に続けて実学の例をあげています。かな 47 字、手紙の書き方、帳簿のつけ方、そろばん、はかりの使い方、さらに進んで学ぶべきものとして、地理学、物理学、歴史、倫理（道徳）学です。3 番目の文章は、地理学などは西洋の学問を勉強せよと言っており、蟠桃と共通の問題意識です。漢字ではなく「かな」で済ませるようにして、優秀な若者には英語などの勉強をすすめています。

こうしてみると、蟠桃の先進性が分かりますが、思想全体を見るとやはり福沢は新時代の人物です。例えば、漢字の使用に消極的なのは同じですが、福沢は儒教も重視していません。漢字に不満がある蟠桃ですが、朱子学はやはり重視しています。福沢は新しい日本に儒教は必要ないと考えていたようです。

蟠桃は倫理面では、儒教の「仁・義・忠・孝」をそのまま受け入れ、士農工商など江戸時代の社会秩序に疑問を持っていません。福沢は「独立自尊」を掲げ国民一人一人の「自立」が必要だと考えていたのです。

山片蟠桃の授業は以上です。

では、課題レポートです。今回の山片蟠桃の思想を見て、その感想を書いてください。

A 4 サイズ 1 枚で、word で作成したファイルを caddie に提出してください。

締め切りは 7 月 1 3 日です。

※Caddie の終了時刻ですが、設定は 1 3 日 2 3 時 5 9 分となっています。ジャスト 5 9 分で Caddie が消えますので注意してください。個人的な推測ですが、6 0 分に設定すると、同時に日付が変わり 0 時 0 分になるので、Caddie が誤作動する可能性があるからではないかと思います。なお秒単位の設定はできません。